The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	障害のあるきょうだいを持つ者（ISD）の進路選択に関する日本国内の先行研究の文献レビュー ： 「個人モデル」から「脱個人モデル」へ
Author(s)	岸田, 玄太
Citation	大阪大学教育学年報. 2025, 30, p. 15-23
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100463
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

障害のあるきょうだいを持つ者（ISD）の進路選択に関する日本国内の先行研究の文献レビュー
―「個人モデル」から「脱個人モデル」へ―

岸　田　玄　太

要旨

本稿の目的は、障害のあるきょうだいを持つ者（ISD）の進路選択に関する先行研究のレビューである。国内外で、このテーマに関する研究が増え始めている。検討が不十分な点を明らかにするために、本稿は文献レビューを行なった。対象は、ISDが調査対象とされている実証研究である。レビューの視点は、「障害の経験が社会の中で形成される」という見方をもつ「脱個人モデル」である（Meltzer and Kramer 2016）。ISDの進路選択におけるSDや親との関係性に注目した。その結果、ISDの進路を形成するプロセスにおいて、親による働きかけが十分に注目されていない点が明らかになった。親による働きかけが、SDの障害に対するISDの認識に影響を与え、ISDの進路選択を特定の分野へと導く一因となっている。また、ISDの進路選択においてSDによる影響の程度や有無が一貫していない。一貫しない背景には、ISDの社会的な立場による差異を考慮していないことがあると考えられる。これらは、SDの障害をISDの行為の要因として説明する「個人モデル」による従来の理解だけにとどまらない可能性が十分にあるといえよう。今後のISDの進路選択に関する研究では、「脱個人」モデルの視点が包括的に必要とされている。

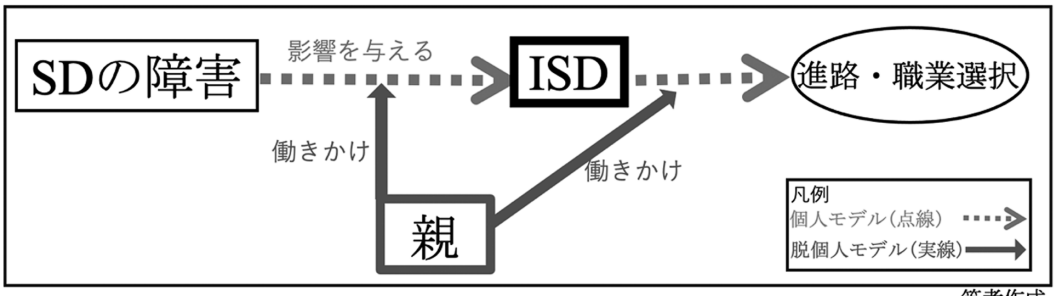
1．問題設定

本稿の目的は、障害のあるきょうだいを持つ者（ISD）の進路選択に関する実証研究を「脱個人モデル」の観点で行うレビューである。まず、表記を簡潔にするために、障害を有するきょうだいを「SD（Siblings with Disabilities）」、障害を有するきょうだいをもつ者を「ISD（Individuals who have a Sibling with Disabilities）」と略記する（藤田ほか 2008）。また、ISD自身に障害を持たないことを前提とする。

これまでのISDに関する研究では、SDとISDとの関係性に注目が集められてきた。Meltzer and Kramer（2016）によると、この関係性に注目した研究領域はきょうだい障害研究（Sibling-Disability Research）と呼ばれている。この分野では「個人モデル」の観点で研究が主に進められてきた（Meltzer and Kramer 2016）。「個人モデル（Individualization）」は、SDの障害がISDの発達や心理に及ぼす直接的な影響や混乱に焦点が一貫して当てられている。このアプローチはきょうだい障害研究の大部分を占めており、ISDは一貫して「個人モデル」の枠組みで捉えられてきた。この「個人モデル」に焦点が当てられたことにより、研究分野の範囲が狭まり、SDとISDの共通した経験や、それらの経験に影響を与える社会的・ポリティカルな力を探ることが歴史的に強調されなかった（Meltzer and Kramer 2016）。「個人モデル」に対峙して、次に登場した見方が「脱個人モデル（De-individualize[(1)]）」である。「脱個人モデル」とは、そうした個人モデルの背後にある社会・文化的な背景を解明し、社会の中で障害の経験がどのように形成されるのかを説明するアプローチである（Meltzer and Kramer 2016）。

きょうだい障害研究は、ISDの進路選択に関するテーマに関する研究が近年増えている。その背景には、医療･心理学の分野でISDのライフコースに対してSDの障害による影響を測る研究の増加がある。ライフコースは就職、結婚、介護が含まれる長期的な時系列を扱う概念として用いられているが（笠田 2014）、その中で、特にISDの進路選択の形成にSDによる障害が大きく影響していることが近年指摘されている。それらの研究により、SDの障害がISDの進路を動機づける影響があることや（木村ほか 2023, 石塚・五位塚 2019, 立石2020など）、対人援助職[(2)]を選ぶ傾向があることが指摘されている（上野2017, Jenna H. Beffel et al 2023）。また、女性ISDが男性ISDと比べて対人援助職を選びやすい傾向も見出されている（松井・吉岡2019, Taylor, J. L. et al 2011）。一方で、ISDの進路選択には、SDの障害だけでなく親の考え方や教育方針も影響すると考えられる（笠田2014, 松井･吉岡2019など）。しかしながらISDに限らず､親子研究の領域においては、社会が不確実化・不安定化する現在、親の子育てへの責任は重くなり、自立できる子どもに育てようとする親の教育的関与は強まっていることが言われている（中澤・余田2014）。もちろん、ISDの進路選択において親の働きかけによる影響に着目した研究もあるが、この点に関しては、まだまだ検討が不十分である。これまでの研究においても、ISDが主体的に進路選択を行うためには、親がISDの自由な選択を直接的な言葉で保障することが重要だと言われている（笠田2014）。しかし、SDの障害に対するISDの認識の形成に親がどのように関与しているのかについてあまり注目されていない。つまり、ISDが親の希望や願望に沿った進路選択を行なってきた可能性は検討されていない。

本稿は、日本国内のISDの進路選択に関する研究で検討不十分な点を明らかにするために文献研究を行う。対象とする文献は、ISDが調査対象とされている実証研究である。社会・文化的な力が見過ごされてきたかを明らかにするとともに、親による働きかけに焦点を当てる必要性を指摘する。分析枠組みは図１に示しており、以下の２点に注目する。１つ目は、親による働きかけがSDの障害に対するISDの認識の形成にどのように影響を与えているのかという点である。２つ目は、親による働きかけがISDの進路選択にどのように影響を与えているのかという点である。その上で、今後のISDの進路選択に関する研究では、「脱個人モデル」の視点が求められる点について考察する。



筆者作成

図１　分析モデルの枠組み

2．研究方法

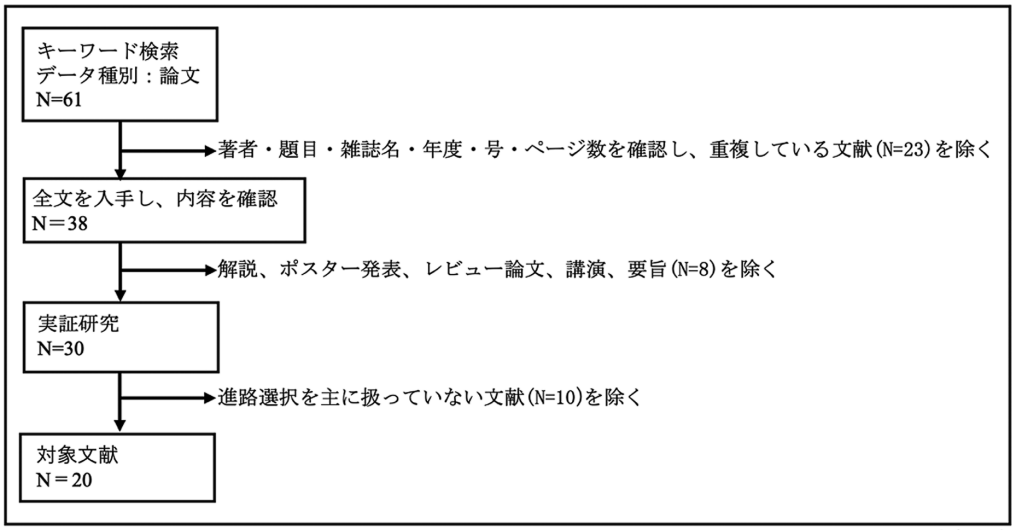
分析対象とする文献は以下のプロセスで抽出した。「CiNii Articles－日本の論文・データをさがす」を用いて、ISDの進路選択に関連するキーワードを用いて、検索をかけた。具体的なキーワードは以下の10点である。それは「障害ANDきょうだいAND進路」、「障害ANDきょうだいANDライフコース」、「障害ANDきょうだいANDライフストーリー」、「障害ANDきょうだいAND青年期」、「障害ANDきょうだいAND職業」、「障がいANDきょうだいAND進路」、「障がいANDきょうだいANDライフコース」、「障がいANDきょうだいANDライフストーリー」、「障がいAND きょうだいAND青年期」、「障がいANDきょうだいAND職業」である。表１のように、合計して計61件となった（2024年10月29日時点）。

次は図２のように、以下の手順で分析対象の文献をスクリーニングした。「CiNii Articles－日本の論文・データをさがす」に記載されている情報から、重複している文献、解説、ポスター発表、レビュー論文、講演、要旨を除き、実証研究を扱った文献に絞る。そして、進路選択を主に扱っていない文献を除く[(3)]。この作業を通じて、最終的に計20件を分析対象とした。

表１　CiNii articles 検索結果（データ種別：論文）

検索語①	検索語②	検索語③	件数	検索語①	検索語②	検索語③	件数
障害	きょうだい	進路	5	障がい	きょうだい	進路	2
障害	きょうだい	ライフコース	2	障がい	きょうだい	ライフコース	4
障害	きょうだい	ライフストーリー	9	障がい	きょうだい	ライフストーリー	4
障害	きょうだい	青年期	23	障がい	きょうだい	青年期	5
障害	きょうだい	職業	4	障がい	きょうだい	職業	3
計			43				18
総数							61

筆者作成



筆者作成

図２　文献検索の手順

3．研究結果

3.1 SDの障害の影響に着目した研究

SDの障害がISDの進路・職業選択に影響を与えるという知見がある。具体的には、SDの存在が対人援助職に関心をもたらした点である。（木村ほか 2023, 力石2020, 石塚・五位塚2019, 松井・吉岡 2019など）。木村ほか（2023）は関心を持った要因を心理学的な観点から示唆している。それは、「障害のある同胞（SDと同様[4]）と過ごす中で育まれた共感的理解[5]や精神的成熟[6]が，きょうだい（ISDと同様[7]）自身の自己肯定感を高め，内面的成長を促進したといえる。このような経験を通したきょうだい自身の成長により，障害をもつ者の成長を支える職業に関心を抱いたと考えられる。」（木村ほか2023, 132頁）という説明である。他方、対人援助職以外で、将来の職業観に影響を与えたケースもある。将来の夢をもてたり（藤原・川島2011）、将来障害についての本の出版に携わりたい（越智ほか2017）といった希望する職業についてISDが述べている場合が発見されている。一方で、SDの障害による影響を受けていないケース（越智ほか2017）や、SDとは関係のない仕事や将来の夢を実現したいと考えるケースもある（沼口ほか2021、笠田2014）。

このように、ISDの進路・職業選択に関してはSDの障害による影響の程度や有無が一貫していない。これには、「個人モデル」では、SDの障害をISDがどう捉えているのかについて着目する観点が欠けている。つまり、SDの障害に対するISDの認識がISDの社会的な立場によって異なる可能性が検討されていない。木村ほか（2023）の調査対象者が全員女性の大学生に限定されているにもかかわらず、ジェンダーが影響している点については検討していないことは重要な課題だろう。

3.2 ISDのきょうだい役割に着目した研究

ISDの進路選択において、きょうだい役割に着目する研究がある（春野・石山 2011, 石塚・五位塚 2019など）。思春期後期から青年期前期にあるISDに対し、家族に関連して抱く悩みに関する質問紙調査を行った阿部（2023）は、進路や結婚の問題など、将来の生活への懸念が中心となっていることを示した。質問項目の「SDのことを考えると、自分の進路をどう選択するのがよいか」から得られた結果で、阿部（2023）は進路でISDが悩んでいると考察している。ただISDがSDのことをどのように考えて、ISDがどのように選択することで悩んでいるのかについて明確に明らかになっていない。

土屋・高橋（2023）は、SDの存在を優先したISDの進路・職業選択を、ISD自らの意思で行なってきたことを明らかにした。土屋・高橋（2023）はISDがSDを優先する要因を以下のように推察している。「きょうだいは、幼少期から青年期までの家族との生活において成長する過程の中で、同胞と家族のことを最優先で考えていく思考が形成され、そこにきょうだい（ISD）としての存在価値を見出す」（土屋・高橋2023, 41頁）。その背景には学童期のISDの過ごし方が関係していると以下のように取り上げている。それは「学童期の、【親の姿を見ての同胞の介護の手伝い】を行ったことや、役に立つ存在となりたいという気持ちが優先され、同胞の世話をすることよって自分の存在価値を見出し、“良いきょうだい”でいることで“親が喜ぶ姿”を見て【自分のことよりも、同胞の生命と親を優先】することによって、きょうだい自身も満足するという思考へとつながっていった」（土屋・高橋2023, 41頁）と述べている。これらの体験がSDを優先した進路・職業選択につながっていると土屋・高橋（2023）は指摘している。しかし、親による働きかけがISDの進路選択の分野を水路づけた可能性については、十分に検討されていない。ISDが主体的に進路を選びとったという点に焦点が置かれている。

また原田・能智（2012）は、「二重のライフストーリー」を生きていることを明らかにした研究である。「二

重のライフストーリー」をSDの人生も分け合い、ISD自らのものとして引き受けることを指している。ある調査対象者の進路選択の場面を取り上げて、「父親から自分が生まれた理由を聞かされたことをきっかけに，自分の人生は姉のためのものという自己物語をつくったようである。四年制大学に浪人せずに入学するようにと両親から言われて受験ずくめの生活をしていた高校時代にも触れ，家族のために『自分の人生を生きてこなかった』とも述べている」（原田・能智2012, 32-33頁）ことを紹介している。この進路選択の場面は、ISDがきょうだい役割を親から受け入れているプロセスとして描かれている。しかし、SDの障害に対するISDの捉え方を親が形作っている点について十分に議論していない。この場合は、姉SDの世話することを妹ISDに求めている点である。しかし親によってはISDに世話を求めないケースも考えられる。SDの障害をISDに親が認識づけたのかに関しては、親による働きかけの影響は否定できない。「二重のライフストーリー」をISD自ら引き受けるものとして描かれているが、「二重のライフストーリー」を引き受けるように親から働きかけたことが強く影響していたのではないだろうか。

一方で、笠田（2014）はISDがSDと離れて将来を考える時間を持つ点に着目している。それは、「〈きょうだいの役割を意識する〉中で，きょうだいが同胞のケアに携わる可能性や家族内外で期待される役割を当然のものとして受け入れ，社会的にも文化的にも同胞のケアを理由に，きょうだいのライフコース選択が制約される事態を，この捉え直しの体験が抑制する。」（笠田2014, 185頁）と述べている。また越智ほか（2017）の研究でも、ISDが「実家から離れてしまうと同胞の世話が大変になるから離れられないという〈進路選択の制限〉」（越智ほか2017, 81頁）と述べている。SDと暮らすことが進路選択の制約になると指摘している。しかし、ISDをSDから離れる時間を作る親の働きかけの有無が、SDの障害を進路選択の制約であるとISDが捉えることに影響しているだろう。

3.3 「SDのきょうだいであること」をISDに意識づける親による働きかけ

松井・吉岡（2019）はISDであることがISDの進路選択に影響しているかどうかを調査した。対人援助職就業者と非対人援助職就業者間の比較において、進路選択の際における、両親の接し方、それに対してISDがどのように受け取ったということが影響していることを明らかにした。非対人援助職就業者・志望者のISDは、親からSDがいるからという理由で、特定の進路を押し付けられるということはなく、「自身の道を行きなさい」と両親に言われた時も、その言葉通りに受け取っていると指摘している（松井･吉岡2019）。一方で、対人援助職就業者・志望者のISDでは、親の接し方が異なる。具体的には、以下の３点をあげている。１つ目は、極力平等に接してくれようとしていたが、平等ではないとISDが感じていた点である。２つ目はSDと比べられたことに対して、ISDがプレッシャーを感じていた点である。３つ目は親は将来のSDの面倒をみなくてもいいと言っているが、本心はみてほしいと思っているのではないかとISDが感じていた点である（松井・吉岡 2019）。このように、松井・吉岡（2019）には「脱個人モデル」の視点が含まれる。それは、対人援助職就業者と非対人援助職就業者間の比較において親からの働きかけに差異があると指摘した点である。さらに、性差が対人援助職・非対人援助職の選択に強く影響していると指摘している。

3.4 ISDに対する暗黙の親による働きかけ

一方で、潜在的に親による影響が見られるケースもある。上野（2012, 2017）の事例では、調査対象者の一人であるISDが医者を選択した経緯を考察している[(8)]。このISDは母親からの要望がなく、高校入学当初は姉SDの影響で養護学校教員を希望していた。高校の最終段階で、他者による助言によって医学部を受験した。このケースについて、上野（2017）は、「Aさんは[(9)]、母親が姉の通院に苦労した姿を見て育ってい

るため、母親を助けたいという気持ちを抱いている。姉の通院に苦労した理由には、医師全員が障がい者への理解があるわけではないことも含まれていたとAさんは考えている。自分が人脈を作ることで母親の苦労や自分の心配を解消したいという思い、家族のために自分が頑張ろうという気持ちが読み取れる。」（上野2017, 194頁）と述べている。ここでは、直接的な要望が親からあったわけではないが、親やSDとの過ごし方による影響があるにもかかわらず、その点についてはあまり言及がない。また、平本（2018）は、調査対象者であるISDが選んだ保育士という職業に求めるものに「幼少時に母親との間に体験した孤独や不安を打ち消すことがあった。」（平本2018, 154頁）と考察している。平本（2018）は、「保育士という職業選択」が主体的なライフイベントの選択を行っていると指摘している。SDの障害が孤独や不安の要因であると述べている点は個人モデルの見方で考えられる。しかし、親の期待とは何かをISDが模索している場面については、期待の中身が問われていない。SDの障害を理由に心理学を学ぶことをISDは望んでいたが、親がそのようにISDに望んでいた可能性はないだろうか。

3.5 親が重要な存在となって、ISDの進路を後押しする親による働きかけ

一方で、ISDの進路選択に対する親からの働きかけの影響を明確に取り上げた研究もある。木村ほか(2023)は、「親の前向きな養育態度は，きょうだいの同胞に対する理解に肯定的影響を与え，きょうだい自身の内面的成長を後押ししたといえる。親がきょうだいに対して直接的に，自由な生き方を尊重するような言葉掛けをしたことも，将来に対するきょうだいの安心感や，自身の進路に対する前向きな姿勢に繋がった可能性がある。」（木村2023, 133頁）と説明している。さらに、進路選択における迷いや葛藤を解決する重要な存在として親があげられている（笠田2013, 2014, 木村ほか2023, 大瀧2018など）。笠田（2014）は「きょうだいが自らライフコース選択の選択肢を制限したり，これまでの自己の経験を活かそうと，障がい児者の援助者となる選択に自信をなくしたりした時に，〈親から選択の自由を保障してもらうことが後押しになる〉（笠田2014, 185頁）と述べている。また笠田（2013）は親の後押しがなかったケースについても次のように考察している。「健常であることを理由に関心を向けられずに過ごしてきたきょうだいは，家庭の中での孤独感を葛藤の維持要因として，次第に親への怒りや不信感といった感情を募らせていく。この家庭内での孤独感を持ちながら，消極的なライフコース選択を行ったきょうだいは，同胞のケアへの葛藤が中年期まで長引いたり，これまでの体験において自己選択の実感を持てなかったりしてしまうことが示された。」（笠田2013, 234頁）。そして笠田（2013, 2014）はSDの障害が進路の制約になることを親からの後押しで解決する重要性について指摘している。笠田（2013）は具体的な親からの後押しを以下のように取り上げている。「「同胞のケア提供者になる」という以外の道を保障してもらう体験が挙げられる。特に母親から「あなたの人生はあなたのために使えばいい」と改めて直接言われることは，無言のうちに感じてきた親の期待に閉塞感を感じたり，自ら選択肢を制限したりしているきょうだいを主体的な選択へと後押しする大きな影響力を持っていた。」（笠田 2013, 234頁）。ただ、親がISDに望んでいる進路や専門分野であったからこそ、後押しをしているのではないかという「脱個人」的な見方について十分に検討していない。

4．まとめと考察

本稿は「脱個人モデル」の視点で先行研究のレビューを進めてきた。ISDの進路を形成するプロセスにおいて、親による働きかけが十分に注目されていない点が本稿で明らかになった。親による働きかけが、SDの障害に対するISDの認識に影響を与え、ISDの進路選択を特定の分野へと導く可能性が高い。従来の「個

人モデル」の観点では、SDの障害に対するISDの認識について、親がどう関与したかを注目することが欠けていたと考えられる。さらに、ISDの進路選択においてSDによる影響の程度や有無が一貫していない点も検討すべき事柄である。一貫しない背景には、ISDの社会的な立場による差異を考慮していないことがあると考えられる。「脱個人モデル」の観点で、親による働きかけや社会的な立場に注目することで、ISDの進路を形成しているプロセスについて明らかにできる可能性は残されているのではないだろうか。

最後に本稿の限界と今後の課題について述べる。収集した文献が限られており、重要な文献を見落としている可能性が高い。本稿の分析対象は、海外の文献は含まれておらず、国内の文献のみとなっている。そして、ISDの進路選択は親だけではなく、学校教員や友人などの人々との関わりが影響していることも推察される。これらの点については、今後の研究で十分に検討していく必要がある。ISDの進路選択に関する研究をより有意義にしていくためにも、「脱個人モデル」の観点から、包括的に研究を進めていくことが求められる。

〈注〉

(1) 本稿ではMeltzer and Kramer（2016）で用いられているIndividualizationを「個人モデル」、De-individualizeを「脱個人モデル」と日本語訳する。日本語訳する際に、障害を個人的な問題として捉える「個人モデル」の見方（土屋 2017）を参照した。
(2) 対人援助職はTaylor, J. L. et al（2011）の分類によると、対人援助職に教師、医師、保育士、聖職者、看護師を含めていた。社会福祉士やソーシャルワーカーなどを含めて対人援助職とする研究が見られるため、本稿では医療・教育・福祉に関連する職業を対人援助職に含めることとする。
(3) 清水（2021）を分析対象から外している。家族内の役割尺度（役割行動）の因子分析結果の表で因子分析で「私は，親の望む進路選択をした」を第二因子（子役割）に再度、新しく変数化されている。進路選択を主に扱っておらず、今回のレビューの目的に合わないと判断し、分析対象から外した。
(4) 表記を簡潔にするために、障害を有するきょうだいを「同胞」と表記している場合が医療・心理学の分野の研究では多い。本稿では、SDと同じ者を指している。
(5) 共感的理解：木村ほか（2023）逐語録彫られたデータを切片化，コード化する際に生成されたキーワードであることが確認される。共感的理解というキーワードに基づいているインタビュー例は「小学校で流行した自閉症に関する漫画を読んだ」や「学校での生き生きした同胞の姿に衝撃を受けた」、「留学先で言葉が通じず同胞に共感した」などから概念化した表現である。
(6) 精神的成熟：(6) と同様に、木村ほか（2023）の研究で、「思いやりが生まれた」や「我慢強い／何でも自分で解決する」という語りから概念化した表現である。
(7) (4) と同様に障害を有するきょうだいを「きょうだい」と表記されている場合が多い。本稿ではISDを同じ者を指している。
(8) 上野（2012, 2017）では、同一の調査対象者を取り上げている。
(9) Aさんは上野（2017）の調査対象者である。

〈引用文献〉

阿部美穂子 2023「障害のある人の「もうすぐ大人期」のきょうだいが抱く悩みに関する研究：思春期後期～青年期前期にあるきょうだいへのアンケート調査から」『山梨県立大学看護学部・看護学研究科研究ジャーナル』10巻 1 号，1-14頁.

藤田由起・沖田夏美・樋渡由貴・井手沙織・尾方里帆・遠矢浩一 2008「きょうだいの障がい有無がきょうだい関係の認知や対人関係に及ぼす影響」『九州大学総合臨床心理研究』10巻，17-24頁.

藤原紀世子・川島美保 2011「小児慢性疾患の同胞をもつ青年期のきょうだいが得る糧」『日本小児看護学会誌』20巻 1 号，1-8頁.

春野聡子･石山貴章 2011「障害者のきょうだいの思いの変容と将来に対する考え方」『応用障害心理学研究』10号，39-48頁.

原田満里子・能智正博 2012「二重のライフストーリーを生きる：障がい者のきょうだいの語り合いからみえるも

の」『質的心理学研究』11巻１号，26-44頁.
平本憲二 2018「高齢軽度知的障害者のきょうだいのライフストーリー ―障害者のきょうだいとしての心理的揺らぎ―」『社会問題研究』67巻，147-159頁.
石塚千紗・五位塚和也 2019「障がいのある者を 同胞にもつきょうだいの進路決定プロセス：複線径路・等至性モデルによる教員志望の青年期きょうだいの語りの分析」『大阪大谷大学教育学部特別支援教育実践研究センター』３号，37-47頁.
Jenna H. Beffel a, Amy K. Nuttall a, Claire D. Vallotton a, Carla A. Peterson b, & Kalli B. Decker 2023 “Influences of sibling disability and childhood caregiving experiences on interest in a disability-specific helping profession” Children and Youth Services Review Vol. 104, pp. 1-9.
笠田舞 2013「知的障がい者のきょうだいのライフコース選択プロセス：中年期きょうだいにとって，葛藤の解決及び維持につながった要因」『発達心理学研究』24巻３号，229-237頁.
――2014「知的障がい者のきょうだいが体験するライフコース選択のプロセス―青年期のきょうだいが辿る多様な径路と選択における迷いに着目して―」『質的心理学研究』13巻１号，176-190頁.
木村芽生・鳥居深雪・池田浩之 2023「発達障害・知的障害をもつ者の青年期のきょうだいの進路選択に関する研究―個別の語りを通して―」『発達心理臨床研究』29巻，127-137頁.
木村芽生・池田浩之 2024「自閉症スペクトラム障害のある者のきょうだいが同胞の障害を理解するプロセス：青年期のきょうだいの語りを通して」『特殊教育学研究』62巻２号，71-80頁.
松井奏子・吉岡恒生 2019「障害のある兄弟姉妹をもつきょうだいの進路・職業選択 ―13人のインタビューを通して―」『愛知教育大学教育臨床総合センター紀要』８号，36-43頁.
Meltzer, A. & Kramer, J 2016 “Siblinghood through disability studies perspectives: Diversifying discourse and knowledge about siblings with and without disabilities” Disability & Society, Vol. 31, No.1 pp. 17-32.
中澤智恵・余田翔平 2014「〈家族と教育〉に関する研究動向」『教育社会学研究』95巻，171-205頁.
成田泉・水内豊和 2016 自閉症スペクトラム児・者の適応的な社会生活を送るきょうだいの様相とその適応への要因―青年期におけるきょうだいに対するインタビューの検討から―.『日本小児保健協会編 小児保健研究』75巻５号，629-635頁.
沼口知恵子・西垣佳織・涌水理恵・藤岡　寛・佐藤奈保 2021「重症心身障害児と共に生活するきょうだいの想い」,『日本重症心身障害学会誌』46巻３号，315-322頁.
大瀧玲子 2018「成人期にある知的障害を伴わない発達障害者のきょうだいの体験に関する一考察」『質的心理学研究』17巻１号，43-163頁.
越智彩帆・越智文・山下祥代・樫木暢子・西朋子 2017「重症心身障害児のきょうだいが抱く思いの変容と周囲の人々との関連性について;青年期のきょうだいに対する聞き取り調査から」『Journal of Inclusive Education』３巻，77-86頁.
清水渓介・板倉憲政 2021「障害児・者のきょうだいの子ども時期における家族内役割と青年期における過剰適応との関連」『家族心理学研究』34巻２号，142-156頁.
田中亜美・中村菜々子 2013「障害児・者を同胞に持つ青年期きょうだいのきょうだい関係認知とサポート提供行動の質的分類」『発達心理臨床研究』19巻，19-30頁.
立石力斗 2020「知的障害者のきょうだいの進路選択プロセス：特別支援学校教員を目指した事例に焦点をあてて」『日本基礎教育学会紀要』25号，37-42頁.
Taylor, J. L., & Shivers, C. M.2011 “Predictors of helping profession choice and volunteerism among siblings of adults with mild intellectual deficits” American Association on Intellectual and Developmental Disabilities Vol. 116, No.4, pp. 263-277.
土屋沙織・髙橋衣 2023「在宅で医療的ケアを受ける重症心身障害児（者）の青年期きょうだいのライフイベントに伴う体験」『日本小児看護学会誌』32巻，35-43頁.
土屋葉 2017「障害のある人と家族をめぐる研究動向と課題」『家族社会学研究』29巻１号，82-90頁.
上野順子 2012「障がい者の「きょうだい」であり対人援助職者である人のライフストーリー分析：転機としての職業選択に対する動機づけ」『東洋大学大学院紀要』49巻，277-291頁.
――2017「対人援助職を選択した障がい者のきょうだいの新しい役割・自己像―職業選択およびそれ以降の転機に着目した分析―」『東洋大学大学院紀要』54巻，183-202頁.

Literature Review of Previous Studies on Career Choice of Individuals with a Sibling with Disabilities (ISD) in Japan – From the "Individual Model" to the "De-individualize Model"

KISHIDA Genta

This study reviews previous research regarding the career choices of individuals who have a sibling with disabilities (ISD). Research on this topic has increased, both domestically and internationally. To clarify the points that have not been adequately examined, this study conducted a literature review. The analysis was based on empirical studies conducted in Japan, in which ISD was the subject of investigation. The review adopts a "de-individualize model" perspective, which offers explanations of how experiences of disability are made within society (Meltzer and Kramer 2016). This study focused on how ISDs' relationships with their siblings with disabilities (SD) and their parents influenced their career choices. Results revealed that parental influence in shaping ISD career paths has not been sufficiently considered. Such parental influence appears to affect ISDs' perceptions of their siblings' disabilities, guiding them toward specific career fields. Furthermore, the degree of influence SD exerts on ISDs' career choices appears to be inconsistent. This inconsistency may stem from a lack of consideration of the differences in the social positions of ISDs. These findings suggest that the conventional understanding, the "individual model" perspective, which focuses on the psychological impact of the SDs' disability in shaping the personal behaviors and choices of the ISD, may not be sufficient. Future research on the career choices of ISD needs to be inclusive of the "de-individualize model" perspective.